

成人看護実習における事例発表会の学びと課題の検討

福岡 真理, 七川 正一

要 旨

A大学における成人看護実習は、健康回復支援実践（基礎）と、その後に行われる健康回復支援実践（応用）で構成されており、それぞれの臨地実習終了後に事例発表会を設けている。本稿では、健康回復支援実践（基礎）と健康回復支援実践（応用）の学びの内容の変化を知ること、事例発表会の学習効果と今後の課題を検討するために、質問紙調査を行った。結果、健康回復支援実践（基礎）の質問項目の回答得点平均値と比較すると、健康回復支援実践（応用）では、ほとんどの項目で上昇した。この要因として、積極性と主体性をもって取り組めるようになった学生個人の成長が大きいと考えられた。また、事例発表会を運営するうえで大切だと考えることについて、基礎は10カテゴリー、応用は8カテゴリーが抽出された。基礎に特化していたカテゴリーは、【教員の発言】をはじめとする3つのカテゴリーが抽出され、応用に特化していたカテゴリーは【時間配分】であった。このことから、教員の関わりとして、基礎では学生の緊張の程度を考慮して肯定的に指導し、応用では学生の自主性を尊重して指導することが示唆された。

キーワード：事例発表会、成人看護実習

I. はじめに

A大学において、成人看護実習は専門分野Ⅱの臨地実習に位置づけられており、健康回復支援実践（基礎）（以下、基礎とする）と健康回復支援実践（応用）（以下、応用とする）で構成され、3年次の後期に行われている。基礎と応用の実習期間は3週間で、1～2週目が臨地実習、3週目を学内実習としている。学内実習では、学生それぞれが受け持った患者の看護過程を振り返り、発表資料としてまとめ、事例発表会を行っている。この事例発表会の目的は、以下の4点である。①看護過程にそって看護が展開されているか思考の振り返りを行う。②自己の実践した看護を理論や文献を用いて意味づけを行う。③実践を通して自らの興味や疑問に気づき、探求の手掛かりと具体的動機につなげる。④事例発表を通して、他者の行った看護を評価する能力を養う。

学生は事例発表の目的、資料作成の方法についてオリエンテーションを受けた後、担当教員の助言・指導を受けながら資料作成を行う。そして、学内実習4日目に作成した資料をもとに事例発表会を体験する。事例発表会は、学生を12～18名のグループに分け、教員3～4名ずつを各グループに配置し運営している。発表時間は1人10分、その後、質疑応答を10分設けている。

これまでに、臨地実習終了後の事例発表会の効果について研究した報告内容として、糸島は、事例検討会は、実施した看護援助や自己の課題を明確にする機会となり、学生間での学びの共有ができた、と述べている¹⁾。また、他学生からの具体的な看護実践の発表とそれに伴う討議は、学生の学びを深め、看護の視点を広げる機会となったという報告もある²⁾。本研究では、基礎と応用の学びの内容の変化を知ること、事例発表会の学習効果と今後の課題を検討する。

II. 研究方法

1. 対象者及び時期

- 1) 対象者：A大学看護学科3年次生（49名）
基礎と応用を履修し、研究参加への同意を得た学生
- 2) 調査日：平成27年10月1日～平成28年1月29日

2. 調査方法

事例発表会終了後に著者らが作成した無記名の質問紙を配布し回答してもらった。質問紙は中島ら³⁾が作成した「事例検討会の評価23項目」を参考に、A大学の事例発表会の目的を考慮し、独自で作成した。質問内容は6段階評価とし、いくつかの項目において回答理由を自由記述で求めた。質問内容を表

1に示す。また、自由記述を求めた項目には○印を付記する。なお、22～24の項目は応用で追加した質問項目である。

3. 分析方法

6段階評価による「事例発表会の効果に対する質問」は、SPSSver.22を使用し分析した。「事例発表会を運営する上で大切だと考える要因」に関する自由記述の内容については、文脈のデータをコード化し、KJ法を用いてカテゴリー形成をした。なお、本分析は研究者2名で討議し、合意形成を行いながら実施した。

4. 倫理的配慮

各事例発表会終了後、研究の趣旨を説明した。質問紙は無記名とし、個人が特定されることはない。研究参加は自由意思であり、不参加であっても当該

科目の成績には影響しないこと、研究結果を論文として公表することを口頭及び文書で説明した。また、対象者の自由意思を尊重するため質問紙配布時に回収せず、指定した期日までに専用の質問紙回収用の箱に提出してもらった。なお、本研究は平成27年8月11日にA大学研究倫理審査委員会で承認されている。

Ⅲ. 結果

1. 基礎と応用の学びの変化

研究対象者49名のうち、質問紙の回収率は、基礎で71.4%、応用で75.5%であった。基礎と応用の対応する項目でt検定を行ったところ、全ての項目で有意差は認められなかった。

基礎の回答得点平均値と比較すると、応用の平均値は、ほとんどの項目で上昇していた。(表1)中でも、上昇の幅が大きかった項目は、「1.看護過程の思考にそって看護が展開されているか思考の振り返りを行うことができた」

表1 事例発表会での学びに関する質問項目と調査結果

	質問項目	基礎		応用	
		平均値	SD	平均値	SD
1	看護過程の思考にそって看護が展開されているか思考の振り返りを行うことができた	3.94	1.03	4.25	0.65
2	事例発表会の資料を作成する過程をとおして、実習で体験したことの整理につながった	4.11	1.08	4.33	0.72
3	事例発表会の資料を作成するにあたり、担当教員とコミュニケーションが充分に取れた	4.17	1.07	3.94	1.07
4	事例発表会の資料を作成するにあたり、他のグループメンバーに相談した	4.29	1.07	3.75	1.32
5	事例発表会の資料を作成する過程をとおして、自己の実践した看護を理論や文献を用いて意味づけを行うことができた	3.54	1.01	3.86	0.80
6	事例発表会に参加したことは、自己の学びを深めるのに役立った	4.06	0.97	4.27	0.80
7	事例発表会では、お互いの経験を共有することができた	4.11	1.08	4.24	0.86
8	事例発表会に参加したことは、自分や他の人の学習姿勢を見直す機会になった	4.12	0.84	4.24	0.76
9	事例発表会では、他者の発表や質疑応答に対して、関心を持って聴くことができた	4.15	0.80	4.27	0.77
10	事例発表会に参加し、わからないこと・疑問に思ったこと・意見など積極的に発言できた	2.97	1.48	3.30	1.35
11	事例発表会の間、メンバー同士が活発に発言して、有効な質疑応答であった	2.94	1.41	3.35	1.03
12	事例発表会に教員が参加することは、学生相互の学びを深めていく上で役立った	4.29	0.80	4.08	0.92
13	事例発表会を通して、他者の行った看護を評価することができた	3.74	0.98	3.84	0.99
14	事例発表会全体を通しての時間配分は、適切であった	3.54	1.20	3.73	1.19
15	自分の役割と責任を終えて、達成感や満足感を得ることができた	3.80	0.93	3.72	0.94
⑩	お互いに意見を述べ合い、学び合うことは必要だと思う	4.57	0.61	4.54	0.69
⑪	事例発表会で学んだことは、今後に役立つと思う	4.31	0.63	4.27	0.77
⑫	質疑応答で他学生、教員から質問を受けたことは、学びにつながり役立つものであった	4.23	0.69	4.19	0.81
⑬	健康回復支援実践を通して自らの興味や疑問に気づき、看護を学ぶことに対して、関心や意欲が高まった	4.00	1.28	4.00	1.00
20	事例発表会をすることによって自己の課題をより明確にすることができた	4.23	0.84	4.17	0.82
⑭	事例発表会を運営する上で、大切なものは何だと思えますか。可能であれば3点挙げて、その理由を教えてください				
⑮	前回、事例発表したときよりも、満足感や達成感が高い			3.59	1.09
⑯	前回の事例発表と比較し、自分自身が成長していると思う			3.51	1.02
⑰	健康回復支援実践(基礎)をふまえて、積極性と主体性をもって取り組むことができた			4.03	0.81

※自由記述を求めた項目には、○を付記

返りを行うことができた」, 「2. 事例発表会の資料を作成する過程をとおして, 実習で体験したことの整理につながった」, 「5. 事例発表会の資料を作成する過程をとおして, 自己の実践した看護を理論や文献を用いて意味づけを行うことができた」, 「6. 事例発表会に参加したことは, 自己の学びを深めるのに役立つ」, 「10. 事例発表会に参加し, わからないこと・疑問に思ったこと・意見など積極的に発言できた」, 「11. 事例発表会の間, メンバー同士が活発に発言して, 有効な質疑応答であった」, の6項目であった。反対に, 基礎より回答得点平均値が低下した主な項目は, 「3. 事例発表会の資料を作成するにあたり, 担当教員とコミュニケーションが充分にとれた」, 「4. 事例発表会の資料を作成するにあたり, 他のグループメンバーに相談した」, 「12. 事例発表会に教員が参加することは, 学生相互の学びを深めていく上で役立つ」の3項目であった。

2. 事例発表会の学習効果

両実習で, 回答得点平均値が4.5以上と高い項目は, 「16. お互いに意見を述べ合い, 学び合うことは必要だと思う」であった。その理由として, 「一人一人違う意見を持ち, それを共有することは互いの理解や視野を深くすると考えるから」, 「互いに意見を述べることで新たな視点に気付くことができ, それを今後の学習に活かすことができるから」, 「それぞれ物事の捉え方が違うため, 自分の視野を広げることにつながったから」, 「他者の意見を取り入れることで自分の看護を見直すことができるから」等の意見がみられた。

反対に, 両実習で, 回答得点平均値が3.5以下の項目は, 「10. 事例発表会に参加し, わからないこと・疑問に思ったこと・意見など積極的に発言できた」, 「11. 事例発表会の間, メンバー同士が活発に発言して, 有効な質疑応答であった」の2項目であったが, この2項目は基礎と応用で比較すると回答得点平均値は上昇していた。

その他, 自由記述を求めた項目に関しては, 基礎と応用それぞれで回答得点が高い記述と回答得点が高い記述に分けて, その理由を以下に記す。

「17. 事例発表会で学んだことは今後役立つと思う」

- ・基礎で回答得点が高い学生の理由
「色々な考え方, 捉え方を学ぶことができたから」, 「他の人の発表から, 疾患や看護など新たな学びが深まった」, 「他者の学びや考え方を知ることができ, 自分の考えを見直す機会となったから」等
- ・基礎で回答得点が高い学生はいなかった
- ・応用で回答得点が高い学生の理由

「臨床に出た際に役立つと思うから」, 「他者の発表を聞いて, 看護が対象によって提供するものが違うことを改めて実感したから」, 「今後の自分の看護につながると思う」等

- ・応用で回答得点が高い学生の理由
「個別性のあるケアなら参考になるが, 普遍的なケアをテーマにしているものは, 教科書的内容で新しい気付きがないため」
- 「18. 質疑応答で他学生, 教員から質問を受けたことは, 学びにつながり役立つものであった」
- ・基礎で回答得点が高い学生の理由
「自分の気が付かなかった点, 曖昧だった点について気付くことができ, 自己の課題を明確にできるため」, 「自分の考えに対してアドバイスが受けれたから」, 「自分に足りなかったもの, 今後の課題について知ることができた」等
- ・基礎で回答得点が高い学生の理由
「言いがかりに感じた」, 「質問を受けて気付くことができたが, その場で答えるには緊張してしまう為, うまく頭が回らない」等
- ・応用で回答得点が高い学生の理由
「自分が気が付かなかった視点から質問を受けて, 学びを深める機会になった」, 「自分が足りなかったところ, 整理できていなかった部分を気付かせてくれた」等
- ・応用で回答得点が高い学生の理由
「教員からの質問(指導内容)は, 納得のいくものではなくそれに対して聞かれても答えることができないから」
- 「19. 健康回復支援実践を通して自らの興味や疑問に気づき, 看護を学ぶことに対して, 関心や意欲が高まった」
- ・基礎で回答得点が高い学生の理由
「看護師や先生からのアドバイスを聞き, 新しい発見があり楽しかった」, 「看護の大変さや, やりがいを感じる事ができた」, 「新たな課題が見つかり, 達成したいと思った」等
- ・基礎で回答得点が高い学生の理由
「看護への学びに対して, 関心や意欲が高まったと感じないから」, 「興味や関心に気付くことができなかった」等
- ・応用で回答得点が高い学生の理由
「ケアの意味を考え, それが対象に合っているのかを考えることができた」, 「自分自身で考え, 看護に繋げることができたから」, 「他者の学びで感動することがあったから」等
- ・応用で回答得点が高い学生の理由

「自分の興味関心のあることについて、検討できる機会になったことは良いことだと思う。しかし、看護を学ぶことに対して関心や意欲が高まるほどではなかった」

次に、応用で追加した質問項目についての自由記述の結果を、回答得点が高い記述と回答得点が低い記述に分けて、その理由を以下に記す。

「22. 前回、事例発表したときよりも、満足感や達成感が高い」

- ・回答得点が高い学生の理由
「前回の課題を踏まえたうえで、事例発表に臨むことができたから」、「基礎よりも深い学びが持てたから」等
- ・回答得点が低い学生の理由
「あまり変わらない」、「教員のコメントで自分の実習が目標に達しているのかが分からなくなったから」等

「23. 前回の事例発表と比較し、自分自身が成長していると思う」

- ・回答得点が高い学生の理由
「実習で行ったことをしっかりと振り返り、発表することができた。質問に対しても自分なりに答えることができた」、「前回より、疑問に思ったことを質問し、積極的に参加できた」等
- ・回答得点が低い学生の理由
「あまり変わらない」、「もう少し、自分の看護の振り返り、学びを深めることができるとよかった」等

「24. 健康回復支援実践（基礎）を踏まえて、積極性と主体性をもって取り組むことができた」

- ・回答得点が高い学生の理由
「積極的に患者さんの援助に入ることができた」、「患者さん、看護師に対して自発的に関わることができた」、「基礎を踏まえて行動することができた」等
- ・回答得点が低い学生の理由
「努力はしたが、結果的にできていなかった」、「自信が持てずに消極的になってしまった」等

3. 事例発表会を運営するうえで大切だと考えること

事例発表会を運営するうえで大切だと考えることを3つ回答してもらい、その理由を自由記述で求めた。得られた自由記述の内容については、文脈のデータをコード化し、KJ法を用いてカテゴリ形成をした。結果、基礎は10カテゴリ、応用は8カテゴリが抽出された。なお、本稿ではカテゴリを【】、

サブカテゴリを<>で示す。

基礎と応用に共通していたカテゴリは、【積極的、主体的に取り組む姿勢】、【分かりやすい発表資料】、【発表会場の環境・雰囲気】、【発表前の準備】、【質疑応答の時間】、【知識】、【発表の仕方】の7つのカテゴリであった。基礎に特化していたカテゴリは、【教員の発言】、【発表会の進行】、【興味関心】の3つのカテゴリであり、応用に特化していたカテゴリは【時間配分】の1つのカテゴリであった。結果を表2に示す。以下に、両実習に共通するカテゴリ、基礎に特化したカテゴリ、応用に特化したカテゴリについて記す。

1) 基礎と応用に共通するカテゴリ

【積極的、主体的に取り組む姿勢】は、<積極性>、<学生の主体性>、<活発に意見すること>、<学ぶ姿勢>で構成されている。これは、学生が主体となって事例発表を運営し、意欲的に取り組むことを指している。

【分かりやすい発表資料】は、<整合性のある内容>、<読みやすい資料作成>、<考察の深さ>で構成されている。これは、事前に聞く側に配布された資料のことで、読み手の立場に立って資料を作成することを意味し、資料の字の読み易さや整理された内容であることを指している。

【発表会場の環境・雰囲気】は、<会場の雰囲気、自由に発言できる場>、<静かな環境>で構成されている。これは、発表を静かに聞ける環境であり、学生が緊張せずに自由に発言できる雰囲気を指している。

【発表前の準備】は、<不十分な準備時間>、<資料に目を通す時間>で構成されている。これは、他学生の発表資料に事前に目を通し質問を考えることや、発表前の事前練習を行うことを指している。

【質疑応答の時間】は、<質疑応答>、<質問の仕方>、<応用力>で構成されている。これは、意見交換の大切さや、質疑に答えることで自身の学びを他者と共有できることを指している。

【知識】は、<病態の理解>、<根拠の理解>で構成されている。これは、他者の発表内容を理解するための知識を指している。

【発表の仕方】は、<分かりやすい発表>、<発表者の声の大きさ>で構成されている。これは、発表者の声が小さいと何を伝えたいのか理解されないため、自分の意見を分かりやすく相手に伝えることを指している。

2) 基礎に特化したカテゴリ

【教員の発言】は、<質疑の仕方>、<学生の努力を

表 2 事例発表会を運営する上で大切だと考える要因
基 礎

カテゴリー	サブカテゴリー
積極的、主体的に 取り組む姿勢	積極性
	学生の主体性
	活発に意見すること
分かりやすい発表資料	整合性のある内容
	読みやすい資料作成
発表会場の環境・雰囲気	静かな環境
	会場の雰囲気
	自由に発言できる場
発表前の準備	不十分な準備時間
質疑応答の時間	質疑応答
	応用力
知識	根拠の理解
	病態の理解
発表の仕方	分かりやすい発表
教員の発言	質疑の仕方
	学生の努力を認める
発表会の進行	全体を把握する力
	円滑な司会進行
興味関心	話を聞く姿勢
	他者の学びを知る
	追求心・探求心

認める>で構成されている。これは、発表者に対しての威圧的な質疑や、否定的な意見を指している。
【発表会の進行】は、<全体を把握する力>、<円滑な司会進行>で構成されている。これは、時間内に発表が進むように運営することを指している。
【興味関心】は、<話を聞く姿勢>、<他者の学びを知る>、<追求心、探求心>で構成されている。これは、他学生の発表に対する興味関心を指している。

3) 応用に特化したカテゴリー

【時間配分】は、<円滑な運営>、<発表時間に制限があることによる弊害>で構成されている。これは、発表会を滞りなく運営し、集中力が保てるようにする時間配分と、発表時間に制限があることにより、伝えたいことが不十分となる弊害を指している。

IV. 考 察

本研究で得られた調査結果より、基礎と応用の学びの内容の変化を比較検討し、事例発表会の学習効果と今後の課題を検討する。

1. 基礎と応用の学びの変化

今回の調査結果では、基礎の回答得点平均値と比較すると、応用では、ほとんどの項目で上昇していた。その中でも上昇の幅が大きかった項目は6項目あり、その内の4項目は、「1.看護過程の思考にそって看護が展開されているか思考の振り返りを行うことが

応 用

カテゴリー	サブカテゴリー
積極的、主体的に 取り組む姿勢	積極性
	学生の主体性
	学ぶ姿勢
分かりやすい発表資料	読みやすい資料作成
	考察の深さ
発表会場の環境・雰囲気	会場の雰囲気 自由に発言できる場
発表前の準備	資料に目を通す時間
	不十分な準備時間
質疑応答の時間	質疑応答
	質問の仕方
知識	病態の理解
発表の仕方	発表者の声の大きさ
	分かりやすい発表
時間配分	円滑な運営
	発表時間に制限があることによる弊害

できた」、「2.事例発表会の資料を作成する過程をとおして、実習で体験したことの整理につながった」、
「5.事例発表会の資料を作成する過程をとおして、自己の実践した看護を理論や文献を用いて意味づけを行うことができた」「6.事例発表会に参加したことは、自己の学びを深めるのに役立った」であった。上記4項目の回答得点平均値の上昇の幅が大きかった理由として、事例発表会の回数を重ねることで、前回よりも自己の体験を客観的に振り返ることができ、自身の力で思考の整理と看護の意味づけができたのではないかと考える。糸島は、事例検討会の効果として、他の学生の事例発表を聞くことで、自分自身が実施してきた看護を客観的に評価することができるようになった。自分自身や患者との関係性を振り返り、自己の価値観を多様化させる機会になっていたと述べている¹⁾。今回の調査では、事例発表を通して思考の振り返りを行い、実習で体験したことの整理や看護の意味を考えることができ、糸島らの事例検討会の効果¹⁾と同様の結果が得られたと考える。また、「10.事例発表会に参加し、わからないこと・疑問に思ったこと・意見など積極的に発言できた」、「11.事例発表会の間、メンバー同士が活発に発言して、有効な質疑応答であった」の2項目も回答得点平均値の上昇の幅が大きかった。基礎における事例発表会は、初めての体験であり、どのようなことを質問してよいかわからなかったことや、限られた時間内で他者の発表内容を十分理解できなかった可能性が考えられる。しかし、応用では、学生が自主的に質問できるなど、参加意識の向上に加えて、発表時間、質疑応答の時間を有効活用できたことが推測される。こ

これらのことから、応用が2回目の事例発表であるため、基礎での学習や経験が活かされたのではないかと考える。また、基礎の実習終了後には、成人実習以外の専門分野Ⅱに該当する臨地実習を経験しているため、実習自体に順応してきた可能性も否定できない。

反対に、回答得点平均値が低下した主な項目は、「3. 事例発表会の資料を作成するにあたり、担当教員とコミュニケーションが十分に取れた」、「4. 事例発表会の資料を作成するにあたり、他のグループメンバーに相談した」、「12. 事例発表会に教員が参加することは、学生相互の学びを深めていく上で役立った」上記3項目の回答得点平均値が低下した要因として考えられるのは、応用での質問項目「24. 健康回復支援実践（基礎）を踏まえて、積極性と主体性をもって取り組むことができた」についての回答得点平均値が4.0以上と高く、その理由として「基礎での経験を踏まえて行動することができた」等の意見が多くみられたことである。これは、応用が2回目の事例発表会であるため、教員・他学生の支援をさほど必要とせず、自分自身の力で取り組めるなど、積極性と主体性が向上してきた結果と考える。熊谷は、成人看護学実習を体験した学生の自己成長感について、実習後半の学生は、成人看護学実習以外の実習で実践能力や思考能力を培ったうえで成人看護学実習に挑むため、実習前半の学生に比べて、患者のケアや自分自身に対して自信をもっており、これが自己成長をしたいという気持ちを促している³⁾と述べている。つまり、これまでの実習の経験を活かし、自己成長したいという思いが、積極性と主体性に繋がったのではないかとと思われる。以上のことから、基礎の回答得点平均値と比較し、応用の回答得点平均値がほとんどの項目で上昇した要因は、積極性と主体性をもって取り組めるようになった学生個人の自己成長が大きいと考える。これは、応用での質問項目「23. 前回の事例発表と比較し、自分自身が成長していると思う」の理由について、「実習で行ったことをしっかりと振り返り、発表することができた。質問に対しても自分なりに答えることができた」、「前回より、疑問に思ったことを質問し、積極的に参加できた」等の前向きな意見が多数を占めていたことから、明らかである。

今回、応用における回答得点平均値がほとんどの項目で上昇したという結果は、本学看護学科の教育目標・卒業時の実践能力の一つに掲げている「自己啓発能力と研究的態度を身につけ、社会の動向に関心をもち、看護の専門性を発展させる能力を養う」ことを達成する一助になると考える。

2. 事例発表会の学習効果

事例発表会の目的に合わせた質問項目の回答得点平均値は、基礎・応用の両方ともに3.5以上という結果より、大半の学生は事例発表会の目的を概ね達成できたと考える。看護基礎教育の場で行われる臨地実習の振り返りには、事例検討会は有効な手段であり、また、臨地実習の充実や看護の発展につながる方法の一つであるという報告⁴⁾から、事例発表会は、学生の学びを深め自己の課題を明確にし、学生自身が成長できる機会になると考える。しかし、プラスの面ばかりではなく、必ずしも成功とは言えない結果もあり、不完全燃焼な思い、語りによる後悔など複雑な心境となる可能性が示唆されている⁴⁾。学生が実習で体験する内容は個人差が大きいため、一人一人の学習効果の向上に向けて、事例発表会の運営方法、教員の関わり方について、検討していく必要があると考える。

事例発表会の目的に合わせた質問項目のうち、基礎と応用ともに回答得点平均値が4.0と高値であった項目は「19. 健康回復支援実践を通して自らの興味や疑問に気づき、看護を学ぶことに対して、関心や意欲が高まった」であった。その理由については、「新しい発見があり楽しかった」、「看護を学ぶことに対して関心が高まった」という意見が多かった。糸島は、他学生からの具体的な看護実践の発表とそれに伴う討議は、学生の学びを深め、看護の視点を広げる機会になったと報告²⁾している。今回の結果からも、事例発表会を通しての学びが学生の視野を広げ、看護に対する関心を深めることに繋がったといえる。一方、否定的な意見として、「看護に対して関心や意欲が高まったと感じない」という記述が少数であるがみられた。この理由として、安ヶ平は、教員が捉えた1・2年次の看護学生の特徴の一つに「看護が目的ではない学生の増加」を述べている⁵⁾ように、親の勧めや資格取得だけを求めて看護学科に入学し、目的意識が低いまま実習に臨んでいる学生は少なくないと思われる。そのような学生にとって、実習での体験は、青年期の発達課題である自己のアイデンティティの確立に直面し、自分自身の在り方を見つめ直す機会になると考える。よって、藤本らが、学生は臨地実習において、教員に【学生を理解した上で成長を促す】といった個別性を踏まえた指導や情緒的な支援を求めていた⁶⁾と報告しているように、学生個々に合わせたサポートが必要であると考えられる。また、事例発表会における教員の対応も、学生の意欲を低下させる1つの要因と明らかになったため、実習前・実習中における学生との関わり方、関係性の構築についても対応していく必要があると考える。

この教員の対応については後述する。

3. 事例発表会を運営するうえで大切だと考える要因

事例発表会を運営するうえで大切だと考える要因について、基礎に特化していたカテゴリーは、【教員の発言】、【発表会の進行】、【興味関心】の3つのカテゴリーであり、応用に特化していたカテゴリーは【時間配分】の1つのカテゴリーであった。今回、基礎に特化していた3つのカテゴリーの中で、特に【教員の発言】については否定的な意見が聞かれた。基礎は、学生にとって初めての専門分野Ⅱに該当する臨地実習であるため、教員やグループメンバーとの関係を構築していくことから始まり、学生は不安と緊張を抱えて実習に臨んでいると推察される。また、事例発表会のように、大人数の前で一人で発表をする経験は少ないため、学生の不安と緊張はさらに強くなっているものと考えられる。加島らは、臨地実習における看護学生のストレスについて、教員は助言しているつもりだが、学生はそれを助言と読み取れず、ストレスを感じていることも考えられると述べている⁷⁾。そのため、教員が気付きの視点を与えようとした質問でも、否定的に捉えてしまっている可能性がある。このことに対して、橋本らは、看護学生が“意欲が向上した”と認知した教員の関わりについて、【支持的姿勢】、【学びの環境調整】、【肯定的な指導】、【建設的な意見】、【意識変容の学習プロセス】、【理解を促す指導】など6つのカテゴリーを提示している⁸⁾。【肯定的な指導】は、学生の頑張りを認め、言葉にして褒めることを指しており、本稿における<学生の努力を認める>という結果と符合していると言える。学生は、事例発表会前の準備を短い期間でやり遂げようと努力している。教員はその事実を踏まえながら言葉を選択し、肯定的な指導、建設的な意見を述べ、学生が理解できるような言葉を使用することが求められる。また、【支持的姿勢】は、気にかけて思いをくむことを指しており、学生に対し関心を示す態度や働きかけを行い支持的態度で関わる必要があると述べている⁸⁾ように、発表中の学生の緊張の度合いを配慮して関わること、質問はひとつひとつ分かりやすいように行うなど、教員側の対応を工夫することが示唆された。他に、それぞれに特化していたカテゴリーとして、基礎では【発表会の進行】、応用では【時間配分】が

ある。専門分野Ⅱの臨地実習が始まるまでに、学生間で発表会等を運営する経験が少ないため、基礎では<全体を把握する力>、<円滑な司会進行>に重点が置かれていたことが推測される。しかし、応用では、応用以外の専門分野Ⅱの臨地実習で得られた経験や、成人看護学実習における2回目の事例発表会であることから、【発表会の進行】以上に【時間配分】に重点が置かれたと考える。他者に分かりやすく説明したい、発表時間を有意義にしたいという考えから、基礎に比べると周囲に目が向けられるようになり、自主的、積極的に事例発表会に参加しているものと推測する。

以上のことより、今後の課題としては、教員の関わりとして、基礎では学生の緊張の程度を考慮して肯定的に指導し、応用では学生の自主性を尊重して指導していくことが示唆された。

参考文献

- 1) 糸島陽子, 鯉坂由紀他 (2005) : 臨地実習終了後の事例検討会の効果, 京都市立短期大学紀要 30, 131-139.
- 2) 糸島陽子, 古屋佳子 (2006) : 臨地実習終了後の事例検討会の効果 (2), 京都市立短期大学紀要 31, 149-159.
- 3) 熊谷有記 (2006) : 成人看護学実習による自己成長感およびそれに関連する要因 ストレッサーとその認知の観点から, 日本看護学会論文集看護教育 (37), 452 - 454
- 4) 永田裕子, 篠木絵理, 濱田麻由美 (2012) : 看護における「事例検討会」に関する文献検討, 東京医療保健大学紀要 6 (1), 43-49
- 5) 安ヶ平伸江他 (2010) : 基礎看護学教員の捉える学生の特徴と教授学習方法の工夫, 聖路加看護学会誌 14 (2), 46-53
- 6) 藤本祐二他 (2011) : 看護学生が臨地実習において教員および看護師に求める資質と能力, 保健学研究, 23 (1), 9-16
- 7) 加島亜由美, 樋口マキエ (2005) : 臨地実習における看護学生のストレスとその対処法, 九州看護福祉大学紀要 7 (1), 5-13
- 8) 橋本美里, 川島美佐子 (2014) : 看護学生が“意欲が向上した”と認知した指導者と教員の実習指導, 足利短期大学研究紀要 34, 27-33

Examining the Learning and Challenges Found at Case Study Presentation Sessions in Clinical Nursing Practice in Adult Nursing

Mari Fukuoka , Syouichi Nanakawa

Department of Nutrition, Faculty of Nursing and Nutrition,
Kagoshima Immaculate Heart University

Key words : Clinical Nursing Practice in Adult Nursing, Case Study Presentation Sessions

Abstract

Courses entitled Practice of Support for Recovery of Health (Basic) and Practice of Support for Recovery of Health (Advanced) that follows the basic course constitute the clinical nursing practice in adult nursing provided at University A. A case study presentation session is held at the end of each clinical practice course. This article describes the questionnaire survey I conducted to clarify the difference in the students' learning in Practice of Support for Recovery of Health (Basic) and Practice of Support for Recovery of Health (Advanced) with a purpose to examine the effect of the presentation sessions on the students' study and find ways to deal with future challenges. The results show that compared with the survey conducted after the Practice of Support for Recovery of Health (Basic), responses after the Practice of Support for Recovery of Health (Advanced) marked higher scores in average for most of the questionnaire items. Individual students at this stage had become able to study actively on their own, and this growth in their attitude was believed to be a major contributing factor to the improved results. Regarding factors considered important for facilitating the presentation session, 10 categories were extracted from the Basic course and eight from the Advanced course. Three categories were identified only after the Basic course including "teachers' remarks." Category found specific to the Advanced course was "allocation of time." These results suggest that teachers should guide students in an affirmative manner paying attention to the degree of their nervousness in the Basic course, while they should respect the students' autonomy in the Advanced course.
